

現代北アメリカ先住民文学における言語, 場所, イメージ

室 淳 子

Issues of Languages, Places, and Images
in Contemporary Native North American Literature

Junko MURO

This paper discusses three cultural issues concerning the languages, places, and images that are found in contemporary Native North American literature since the late 1960s.

First, it examines the issue of language in light of the historical deprivation of native languages and the absence of native voices in contemporary North American society. The discussion focuses on native characters who do not or cannot speak, who embody the silenced condition of native peoples. Native literature highly values oral tradition and storytelling practices, and the literature under discussion in this paper depicts native authors' attempts to describe native silence and voices through these devices.

The discussion then moves to the issue of place in native literature in terms of the usual fixation of natives to the wild American landscape, historical uprootedness, and coerced removal onto reservations. By depicting cultural and physical movement, native literature challenges stereotypes and suggests the mobility and cross-cultural fluidity of native people and their cultures. The ambivalent role of reservations as both places of historical torment and communal homes is also noted.

Finally, the discussion deals with the issue of image, examining native authors' manipulation of stereotyped Indian images which are still dominant throughout the world. By presenting actual and various phases of native lives, native authors subvert the stereotyped images of natives, revealing the images to be not only inaccurate, but also inventions by a dominant culture.

1 はじめに

1960年代後半にN. スコット・ママデイ (N. Scott Momaday) の小説『夜明けの家』(*House Made of Dawn*) がピューリッツァー賞を受賞して以来、アメリカ先住民作家による文学作品は数を増やし、ネイティブ・アメリカン・ルネッサンスとも呼ばれる隆盛を迎えた。35年余を経た現在、アメリカ先住民の文学とその研究は一時の隆盛と賞賛を越え、ひとつの落ち着きと広がりを見せているといえるだろう。批評や研究書の多くは、先住民作家や作品の紹介に始まり、先住民文学全体を論じるものから、より個別の作家や作品に関する研究へと細分化し、新しい作品や作家への注視とともに、かつて注目を浴びなかった初期の作家たちの作品への再評価が進められ、詩や小説を中心とする創作活動と研究は、さらに舞台や映画、児童文学など多岐にわたる分野へと広がりを見せている。一方、先住民文学はその知名度を高めつつも、特に国内における研究の数は、依然として決して多くはなく、時には「特殊」であり、単なる「流行」の一環であると位置付けられることも残念ながら多い。また、多文化主義や文化の複数性への理解が広がる一方で、アメリカ社会や世界各国における保守化と根強い反動があることも、事実であるだろう。アメリカ先住民の現在もまた、改善されつつも、いまだ数々の厳しい社会状況を携えているのが現状である。

本稿は、1960年代後半から現在に至る、北アメリカ先住民の現代文学に見られる特徴を大きく三つに分け、先住民文学における「言語」、「場所」、「イメージ」をめぐる問題をそれぞれ考察していきたい。北アメリカにおける植民の歴史や、同化政策、ステレオタイプのな「インディアン」イメージの影響を強く受けた、現代のグローバル社会に生きる先住民の存在と、抑圧の歴史の隙間に生み出され、創り出され続ける先住民の数々の「声」や「動き」をそこに見ていくことができるだろう。

2 言語

先住民文学と言語の問題に関しては、ヨーロッパ移民との接触以降に進められた一連の同化政策による先住民の言語と文化の文字通りの剥奪と、政治の場や社会における先住民の「声」の不在という二つの観点を背景に考察を試みたい。1960年代の公民権運動の流れを受けたアメリカン・インディアン・ムーブメントの活動は、先住民の人権や不当な社会状況をメディアを通じて世界に訴え、先住民征服を終結させたとする1890年のウーンデッド・ニーの大虐殺以降の歴史的沈黙を破る衝撃を人々に与えたと言われている。時期を同じくして登場した先住民の現代文学もまた、北アメリカの文学史上における大きな空白に区切りを打ち、

「これまで語られることのなかった物語」を語ることを可能にしてきたといえるだろう。多くの先住民作家たちが、先住民の口承の伝統を踏まえて、物語を語ることを強調することにも、先住民側の物語の断絶と社会における「声」の不在に対抗し、物語の存続を可能にさせようとする姿勢を見出すことができる。

詩人のジョイ・ハルジョー (Joy Harjo) は、先住民の間の「書く」行為への強い不信感と「書く」必然性の間において、決して執筆を行うのに恵まれてはいない環境の下で「書き」、英語と西洋文化に基づいた表現形式を用いて「書く」困難さについて触れるが(19-25)、「書く」という行為と、言語そのものへの実験と挑戦は、先住民文学が直面した大きな課題であるともいえるだろう。作品の中における口承性の再現や、口承物語の挿入や形式の採用、空白部分の生成、複数の言語使用、先住民言語の多用、英語の意味や音の変形などは、多くの作品に特徴的な試みとして見出すことができる。また、作品は時に、同化政策や教育による言語の禁止と英語の強要の状況を描き、失われた言語に対する人々の意識を読み取ることも可能である。

興味深いのは、先住民作家による作品に、「語らない」あるいは「語ることのできない」登場人物がしばしば現れることである。『夜明けの家』のエイベル、『儀式』(Ceremony)のテイヨ、『ドライリップスなんてカプスケイシングに追っ払ちまえ』(Dry Lips Oughta Move to Kapuskasing)のディッキー・バード・ホークト、『居留地姉妹』(The Rez Sisters)のザブーニガン、『アンテロプ・ワイフ』(The Antelope Wife)のスウィート・ハート・キャリコ、あるいは『インディアン・キラー』(Indian Killer)のジャックなどに、その例を見ることができる。例えば、ママディの『夜明けの家』は、先住民の青年エイベルを主人公に描くが、彼の声を小説の中で聞くことはほとんどない。作品は、話すことに困難を感じるエイベルの様子を描き、「言いたいことが言えない (“he could not say the things he wanted” 58)」、口が利けない (“dumb” 58)、「言葉にできない (“inarticulate” 58)」、「叫ぼうとしたが、しわがれた喘ぎの音が喉から出るだけであった (“He tried to cry out, but only a hoarse rattle and wheezing came from his throat” 115)」などの表現が使われる。また、レスリー・マーモン・シルコウ (Leslie Marmon Silko) の『儀式』にも、「話せない (“can't talk” 15)」、「見えない舌 (“an invisible tongue” 15)」、「喉がつかえる (“choke” 16)」、「喉がつまる (“gag” 16)」といった表現が多用され、話すことを拒み、話せずにいる主人公テイヨの様子が描かれる。これらの登場人物は、いわば北アメリカ社会における先住民の語ることのない性質を体現し、北アメリカ社会における疎外と伝統的な社会からの切断、劇的な社会変化の中で、語る言葉を失い、語り返す手段を持たない先住民の姿を投影することができるだろう。彼らの語ろうとする強い衝動と試みは、『儀式』の冒頭におけるテイヨ

の姿に典型的に表われており、頭蓋骨の奥で感じ、お腹の中に膨れ上がり喉元に押し寄せる強い思いと悲しみを、外に出そうとして、反吐を吐き、涙を流し、冷や汗をかきつづける行為に、その切実さを見ることができよう。ポストコロニアリズムの批評家ガヤトリ・スピヴァックは、支配側と被支配側との間に生み出される言語の力関係、サバルタン側の語ろうとする最大限の試みとそれが決して聞かれることのない根源的な言語行為の不成立を論じるが(292)、先住民の登場人物が示す沈黙は、先住民側の語りが社会に聞こることのほとんどない状況をも示しているといえるだろう。

さて、一方でそれらの登場人物とは対照的に、非常におしゃべりな登場人物がしばしば描かれていることにも注目することができるだろう。例えば、『夜明けの家』のトサマ、『スモーク・シグナルズ』(Smoke Signals)のトーマス、『ドライ・リップス』や『居留地姉妹』の登場人物たちを挙げることができる。作者ママディ自身を投影しているとされる『夜明けの家』のトサマは、主人公のエイベルとは対照的に「語ることができる」教育を受けた先住民であるが、口承の伝統の価値を語り、聖書の教えを先住民流に解釈する彼の説教は、興味深いものでありながら、胡散臭く、エイベルとの共有のない距離をあらわにしている。ママディは、自分自身とコミュニティーの人々との距離について触れているが、トサマの怪しげな饒舌さは、ママディ自身を含む「語ることが可能になった」先住民たちの語りの限界を揶揄すると同時に、語られない沈黙部分が持つ意味の重要性を訴えているとも考えられるだろう。シャーマン・アレクシー(Sherman Alexie)の映画『スモーク・シグナルズ』のトーマスやトムソン・ハイウェイ(Tomson Highway)の演劇『ドライ・リップス』と『居留地姉妹』の登場人物たちを考慮した場合には、そのユニークな語りや、早口、強力なおしゃべりが、先住民に課せられた社会的・歴史的な沈黙や、無表情に固く沈黙した孤高の存在としての悲劇的なイメージを崩し、人々の持つ笑いとユーモアのエネルギーを感じさせるものである。映画や演劇に登場するこれらの人物は、実際にスクリーンや舞台上に視覚的に現れてその饒舌な語りや笑い声を提示することで、見えない先住民の「存在」と「声」を強く印象づけるものだろう。

重要であるのは、先住民作家たちが示す価値の変換と雑種化への動きにある。『夜明けの家』は、作品の中で一貫してエイベルを語らせず、彼を完全に理解しようとする試みを退けるが、故郷ワラトワの静寂の中にエイベルの言葉の回復を仄めかし、主流社会との関係性において否定的に捉えられた沈黙を、口承の伝統の中で重んじられた静寂のうちに価値転換させる。また、『儀式』における混血のテイヨの新たな語りや、『ドライ・リップス』におけるディッキー・バードやサイモンの発する雑種化された言語は、現代の先住民の置かれた混合的・雑種的な文化状況の中間に生み出されたものとして注目することができる。『ドライ・リップ

ス』において衝撃的であるのは、「語ることのできない」ディッキー・バードが、唯一叫び声を発する場面である。キリスト教の狂信的な信者である伯父と伝統的な信仰を取り戻そうとするサイモンの祈りの歌に挟まれて、耳を塞いで発した彼の苦悶の叫びは、「グロテスクで分裂したクリーの歌の変形 (“a grotesque, fractured version of a Cree chant” 75)」であると描写されている。二つの対立する価値に挟まれて彼が錯乱する姿には、現時点を含めた先住民の姿を象徴的に投影することができ、そこに生み出されたばらばらの変形物は、切断された先住民の自己を表すものだと考えられるだろう。しかし、未だ否定性が強く残されていつつも、完全な沈黙を破って生み出されたその雑種的な声は、新たな声の創造へとつながる可能性を暗示させるものであるかもしれない。『ドライ・リップス』はさらに、サイモンの声の雑種化をも促がす。恋人のレイブにより錯乱し始めたサイモンは、彼が用いていたきれいな英語を崩し、ブローケン・イングリッシュへと移行していく。

…weetha (“him/her” — i.e., no gender) … Christ! What is it? Him? Her? Stupid fucking language, fuck you, da Englesa. Me no speakum no more da goodie Englesa, in Cree we say “weetha,” not “him” or “her” … Aw boozho how are ya? Me good. Me berry, berry good. I seen you! I just seen you jumping jackass thisa away … (110-11)

先住民の現状を問題視し、接触以前の伝統的価値を取り戻そうとするサイモンは、彼の主張にも関わらず、機械や経済の知識に明るく、現代の先住民社会に生き、英語での思考に捕われ続けていることを指摘することができる。ここで発せられたサイモンの言葉は、「きれいな英語」に対し、教養のなさや野卑な印象を与えるやはり否定性の強いものであるが、彼の二項対立的な思考を瞬間的に逃れ、その中間に生み出される言葉として注目することができるだろう。

3 場所

先住民文学と場所の問題をめぐることは、アメリカの広大な大地や自然と強く結びついた先住民のイメージや、土地の剥奪と居留地への強制移住に見られる歴史的な場所との関係性、そしてそれに対する先住民側の再位置付けとを考察していくことができる。

先住民作家は、しばしば場所や移動をめぐる問題設定を試み、既存の概念に挑戦しようとする。例えば、トーマス・キング (Thomas King) は、アメリカ南部のチェロキーを出身にしながらも、カナダでの先住民との交流を通して文学活動を行っており、部族や地理的な

位置付けによって先住民が区別され定義付けされることを批判する (cf. Vizenor 1994, 174)。また、レスリー・マーモン・シルコウの『死者の暦書』(*The Almanac of the Dead*)では、アメリカとメキシコの国境の存在と先住民にとっての意味が疑問視され、国境を敢えてまたがる活動と作品展開を見せている。『死者の暦書』は、アメリカの西部開拓史が示す東から西に向けたフロンティアの拡大と文明化の概念に対し、北から南、南から北に向かう、南北アメリカ先住民の中心部に向けた移動の線を用いているのが注目に値する (cf. Krupat 51-52)。あるいは、ジェラルド・ヴィズナー (Gerald Vizenor) の『コロンブスの子孫たち』(*The Heirs of Columbus*)では、先住民がユーラシア大陸からベーリング海峡を辿ってアメリカに來たとする定説を裏返し、逆のルートを辿った人々の存在を示唆し、その血を引く混血のコロンブスが、新大陸を「発見」するのではなく、再び故郷に辿りついたと想定している。

アメリカの大地や自然と結びついて想像される先住民のイメージは、文化の変容や土地を離れた場所の移動、異文化との混交や現代性とはどこか相容れないようなものであると思われる。しかし、多くの作品は、現実にもまれる多くの人と文化の移動や、複数の文化体験、混合的・雑種的な文化状況を描き、特定の土地や自然と強く結びついた固定的な先住民イメージと文化概念を揺るがせている。実際に、先住民の歴史には数多くの文化的・身体的移動が伴い、現地のガイドや通訳、新世界の報告のための見世物としての渡航、土地の剥奪と居留地への強制移住、寄宿学校就学のためのコミュニティーからの強制的な切断、再移住政策による都市での労働、戦争への従軍、より現代的には旅やビジネスなども挙げることができる。特に、南西部よりも強力かつ早期に入植者たちとの衝突と文化喪失を経験した北西部・東部地域の先住民にとっては、土地や自然からの切断と西洋文明化の推進はより切実であったが、こうした同化政策の一方で、大地や自然と強く結び付いた野性的な「インディアン」のイメージが、今なお残され続けているのは皮肉であるといえるだろう。

先住民作家の作品には、文化的・身体的移動を描くものを多く見ることができる。例えば、レスリー・マーモン・シルコウの『儀式』における呪医ベトニーをその代表的人物として興味深く考察することができるだろう。祖母がメキシコ女性であったベトニーは褐色の目をした混血の先住民であり、先住民を取り巻く状況と世界的な変化を察知し、主人公テイヨの語りを聞き、彼を回復へと導くが、ベトニー自身が文化と場所の移動を体現する人物であることは、彼がサンタフェ鉄道の最上の乗客であり、子供の時にカリフォルニアの学校に向けて鉄道を利用して以来、1903年にシカゴ、1905年にセントルイスを旅し、さらにシアトル、ニューヨーク、オークランド各地の電話帳を収集していることにも表れている。また、ジェラルド・ヴィズナーの『悼む者』(*Griever*)も、混血の先住民を主人公としているが、移動性

を示すようなジプシーの父を持ち、グリーバー自身も移動性のあるトリックスターとして中国へ旅し、教鞭をとるよう設定され、先住民居留地と現代中国社会の政治的な共通性や、トリックスターと孫悟空に見られる文化的接点を描くことで、先住民の移動性・可動性と、文化横断性を示す作品であると位置付けることができる。

興味深いのは、先住民文学が、現代の先住民の移動の必然性と可能性を描き、先住民の混合的・雑種的な文化状況を描くのと同時に、現代のグローバル社会における先住民の新たな位置づけとその問題性をも示唆している点である。『悼む者』は、共通性を感じつつも、コミュニケーションのギャップを伴う距離や限界、中国における先住民の「アメリカ人」としての優位性をあらわにしており、またルイーザ・アードリック (Louise Erdrich) の『アンテロープ・ワイフ』では、環境問題のシンボルにしばしば用いられる先住民たち自身が、消費文化に染まり、大量のごみを放出し、第三世界の森林の破壊と低賃金労働を基盤とする不均衡な経済システムの中に位置する、現代北アメリカ社会の一員である現実を指摘している。レスリー・マーモン・シルコウの『儀式』では、第二次世界大戦での犠牲者でもありながら、世界的な枠組の中で多くの犠牲と仲間殺しに加担する事になった先住民の存在が描き出されている。

移動を描く先住民作家たちがもう一方で問題にしているのは、帰属の場としての「家郷 (home)」の概念であり、先住民にとってのそうした帰る場所の不在、「家郷のない (homeless)」状況を作家達はしばしば扱っている。都市で生まれ、親類や養父母の元を転々として育ったジェラルド・ヴィズナーが、朝鮮戦争の待機軍として滞在した日本を離れる際の手記に、次のような一文が織り込まれている：“I was leaving for home, but there was no home, no home was real to me then; not nostalgia as a home, but home with communal aspirations” (Vizenor 1990, 148)。帰国の途にありながら、帰る場所を持たないヴィズナー自身の「ホームレス」な状況は、移動性の高い彼の作品の数々に反映されるが、例えば『ベアハート』(Bearheart)において、先祖来の森を焼き払われ、「ホーム」を失うブルードの姿は、土地を追われ、「ホームレス」な状況を余儀なくされた先住民を象徴するものであるだろう。また、ルイーザ・アードリックの『アンテロープ・ワイフ』は、現代の都市における先住民の姿を描き、その「ホームレス」な側面は、とりわけ文字通りホームレスに転じたクラウスとリチャードが典型的に表わしている。

先住民作家による作品における居留地という場は、それゆえ、二重の意味合いを重ねて描かれているといえるだろう。政府によって指定され、割り当てられた土地は、必ずしも先住民の生活基盤に即したのではなく、しばしば不毛な隔離された場所にあり、現在もなお、貧困やアルコール中毒の深刻さが依然として残されているのが現状である。居留地を舞台と

する作品の多くは、居留地における問題の深刻さや「何もない (“in the middle of no place” *Love Medicine* 45)」場所として居留地を描いており、居留地を逃れ、憧れる外の世界へ行こうとする逃亡願望は、例えば、トムソン・ハイウェイの『居留地姉妹』において、「トロントに行きたい! (“I wanna go to Toronto!” 2)」とするベレイジアの繰り返しの要求にも、ルイズ・アードリックの『ラブ・メディシン』(*Love Medicine*)における複数の登場人物たちの都市への逃避行動にも表れている。しかし、消極的であったとしても「帰る」場所として認識され、あるいは実際に帰ることはなくとも、精神的な帰属の場や発言の拠点としてしばしば位置付けられるのも居留地であり、人々が何とかそこで生き残り、作り上げてきた場としての再位置付けを、居留地という場が担っているのは確かであると思われる。アードリックの『アンテロープ・ワイフ』は、ノルウェー人、スウェーデン人、インディアンそれぞれの野犬保護員の犬をめぐるのブラック・ジョークを含め、トラックの鍵が開いたままでも決して逃げ出さなかったインディアンの犬について、次のような会話が行われる。

“Oh,” said the Ojibwa, “mine are Indian dogs. Wherever they are, that’s their rez. Every time one of them tries to sneak off, the others pull him back.”

“I don’t like that joke,” said Klaus. “My rez is very special to me. It is my place of authority.” (224)

ここには、居留地の持つ二つの側面が描かれており、「どこにいても居留地と変わらない」とする現実的な厳しい状況への皮肉と、「特別な権威ある場所」だとする居留地の意味の再位置付けとを読むことができるだろう。

4 イメージ

支配的なイメージにおける先住民の沈黙化や土地への固定化は、先に論じた言語や場所の問題においても関係しているが、先住民に与えられたステレオタイプを裏返し、その無効性を明らかにしようとする試みは、多くの作品に共通するテーマである。「インディアン」のイメージは、特に西部劇や、児童文学、童謡などを通して広く普及し、日本においても今なお、コマーシャルやドラマ、遊園地のアトラクション、ビーズやシルバーのアクセサリー、フィギュアや癒しプームなど、様々な形で残存し、再生産されているのを見ることができる。野生味ある「インディアン」イメージは、時には戯画化され、時にはロマンティックに描かれつつも、人々の認識の中に根強く残され続けている。先住民文学は、植民の歴史や文化変

容、多様な部族や生活様式、女性や子供たちを含めた複数の生、混合的・雑種的な文化状況、文化の流動性や人々の移動性、同時代的な存在としての先住民の姿を描くことで、そのような固定的な「インディアン」イメージとのずれを示すものである。

「インディアン」イメージへの作家たちの挑戦は、例えば、表紙や作品に織り込まれる数々の写真に見出すこともできるだろう。先住民は、物珍しい異文化を体現する被写体や社会学的記録として、その意思に拘らず、一方的に写真を取られる立場に長く置かれてきた。ジェラルド・ヴィズナーは、文化批評論『逃亡者のふり』(*Fugitive Poses*)の中で、先住民と写真をめぐる議論を行い、「インディアン」イメージの生成に一役を買ったそれらの写真の多くが、撮影者側の意図や視線を反映して、羽飾りや伝統的な衣装を身に纏ったような「インディアン」らしさを強調するような身振りで写し出され、背景にあるはずのあらゆる文明の痕跡や文字が排除されていることを指摘している。それらの写真には、現実の先住民の姿や物語が存在せず、家族や子供たちを伴ったり、ユーモアのある場面や他の様々な状況を写し出してはいないのだ (Vizenor 1998, 160)。広く流布した写真の多くは、先住民男性の単独の姿を写し、固く無表情な、時に怒ったような表情を見せている。その表情は、一見、神秘性や勇者の迫力、文明に相容れない頑なさ、古来の知恵をもつ古老のようなイメージを駆りたてるようなものであるかもしれないが、実際には、不本意な撮影の状況や撮影者との距離を物語っているものだと考えられるだろう。先住民作家による作品の表紙を飾るのは、作家自身の写真や、俳優たちの写真、日常の中で写し出された写真であり、その笑顔や自然な表情が、上に述べた写真とは対照的である。レスリー・マーモン・シルコウの『ストーリーテラー』(*Storyteller*)は、父や伯父、彼女自身によって写し出された数々の風景写真・人物写真を作品の重要な一部として組み込み、「インディアン」イメージとの相違を示し、背後にある数々の物語を伝える。ジェラルド・ヴィズナーの前述の批評論『逃亡者のふり』の表紙には、小さく写し出されたかつての勇者たちの写真が並べられるが、裏表紙にある作者自身の大きな写真がそのイメージとしての「インディアン」像と、作者自身を含む現在に生きる先住民の姿とを対置させる。多くの勇者たちの写真を提示することは、一方で、写真という沈黙の中に静止し客体化されたかつての先住民たちの姿に再び光を当て、その「不在」を「在」に置き換える試みとも捉えられる。

ステレオタイプの「インディアン」イメージを最も直接的に利用するのは、シャーマン・アレクシーの映画『スモーク・シグナルズ』であり、映画という同じ媒体を通して西部劇や近年の映画における「インディアン」イメージに挑戦し、先住民に与えられるあらゆる真正性を覆そうとしている。映画は実際に西部劇の映像をテレビに映し、「テレビに映るインディアンよりも愚かなのは、テレビの前に座っているインディアンだけだね (“You know,

the only thing dumber than Indians on television is Indians sitting in front of a television.” 73)と、「インディアン」イメージを日常的に目にし、自ら消費する先住民たちの皮肉が指摘される。興味深いのは、そのような「インディアン」イメージを取り込んだ先住民たちが、そのイメージを自ら再現しようとする様子が描かれることである。常に笑っているおしゃべりなトーマスに対し、友人のヴィクターは「本物のインディアン」であるための条件を述べていく。インディアンは、笑ってはならず、バッファローを狩ったばかりのような勇者を装い、話してはならず、大地との密かな交感をしているような神秘性を持たなければならないと(61-62)。二人の真剣なレッスンは、見る者にはおかしく映るが、そのイメージ自体が持つ不自然さを却って露わにしているといえるのだ。

以上、「言語」、「場所」、「イメージ」の三つの観点から、現代北アメリカ先住民文学に関する考察を試みた。現在も進行中の先住民文学の広がり新たな声の可能性をさらに検証していきたい。

* 本稿における議論は、平成16年3月に大阪大学大学院言語文化研究科に提出した博士論文 (*Contemporary Native North American Literature: Languages, Places, and Images*) に基づくものである。

引用文献

- Alexie, Sherman. *Indian Killer*. New York: Atlantic Monthly, 1996. New York: Warner, 1998.
———. *Smoke Signals: A Screenplay*. New York: Hyperion, 1998.
Erdrich, Louise. *The Antelope Wife*. New York: Harper, 1998.
———. *Love Medicine*. 1984. Expanded Edition. New York: Harper, 1993.
Harjo, Joy and Gloria Bird eds. *Reinventing the Enemy's Language: Contemporary Native Women's Writings of North America*. New York: Norton, 1997.
Highway, Tomson. *Dry Lips Oughta Move to Kapuskasing*. First produced at Theatre Passe Muraille, Toronto, 1989; Published by Fifth House, Calgary, 1989.
———. *The Rez Sisters*. First produced at National Canadian Centre, Toronto, 1986; Published by Fifth House, Calgary, 1988.
Krupat, Arnold. *The Turn to the Native: Studies in Criticism & Culture*. Lincoln: U of Nebraska P, 1996.
Momaday, N. Scott. *House Made of Dawn*. 1968. New York: Perennial, 1989.
Silko, Leslie Marmon. *The Almanac of the Dead: A Novel*. 1991. New York: Penguin, 1992.
———. *Ceremony*. 1977. New York: Penguin, 1986.
———. *Storyteller*. New York: Arcade, 1981.
Spivak, Gayatri Chakravorty. *The Spivak Reader: Selected Works of Gayatri Chakravorty Spivak*. Donna Landry and Gerald MacLean eds. New York: Routledge, 1996.

- Vizenor, Gerald. *Darkness in Saint Louis Bearheart*. 1978. Rpt. as *Bearheart: The Heirship Chronicles*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1990.
- . *Fugitive Poses: Native American Indian Scenes of Absence and Presence*. Lincoln: U of Nebraska P, 1998.
- . *Griever: An American Monkey King in China*. New York: Illinois State University/ Fiction Collective, 1987.
- . *The Heirs of Columbus*. Hanover: UP of New England, 1991.
- . *Interior Landscapes: Autobiographical Myths and Metaphors*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1990.
- . *Manifest Manners: Postindian Warriors of Survivance*. Hanover: Wesleyan UP, 1994.